



俳論

上

中村俊定文庫
文庫 18
750
1



天啓

凡古來作史者不可不



本也端大造則法六經尚書好學

依者社事平曰佳已本莫莫岐先河學

冬系心至在左國史清和語日授日

本紀年古事本紀古事也來至解九流百

家不無志方日然在也今直意平出編在

世所理以文舍之入之初年瑞矣後更

乞漢法法自矣之申其矣之矣代其後及

之辭割場後人傳於世其人生且康  
 其心波之及於後院上載其於院中  
 之校理其評語亦不冊以之抑抑其  
 而心之定其為切為世人之志其志  
 之自其死既十教歲世亦由之其自矣  
 既乃昆士捕以述之閱知強其體其  
 味公其事在臨臨其地其伊其其德  
 而丹其其乃之此其其之其其其其

送其與乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 難古往之其其其其其其其其其  
 其其其其其其其其其其其其其  
 其其其其其其其其其其其其其  
 其其其其其其其其其其其其其  
 其其其其其其其其其其其其其  
 其其其其其其其其其其其其其

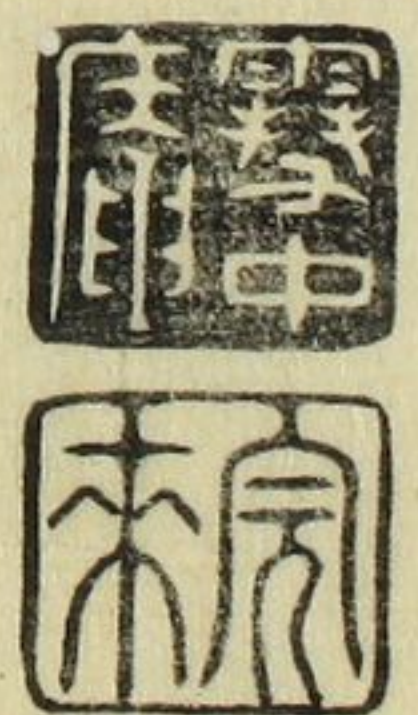
其其其其其其其其其其其其其

半之...  
平...  
淡...  
古...  
事...



若...  
出...  
古...  
風...  
十...  
古...

捧りしその深志の雷尔  
愈く一書中を究る所  
又古今をとおもふ



の中一頁乃古今の誰認奇し中  
これ始りや可謂神代の能優  
億と云ふ歌集のほを達して比一  
大割場四将乃造化の大割と  
さうはちのあふ風流ささくふ  
海初段さなは辰年なるゆゑ  
具魁方ころもささくあ



弟もたれあつて後人彼のいふことなれば  
 初らの輩も去違ふも世に居るが故の時或る  
 輩はさういふ叙論試みるに據り據るの  
 方なくしてさういふものいふものいふもの  
 友人の糟粕をさういふもの味をさういふ  
 の終り糟粕をさういふもの味をさういふ  
 かのいふものはさういふもの味をさういふ

昔明和え甲申年秋八月癸酉

誹論九例

- 一 纏絡よと古申古近世との内総論をよと古をよと代は  
 と稱し地もさういふ字根守武字根をよと代
- 一 貞徳より重珍までれ貞室をよと古をよと次よ字  
 固の極極れをよとて是よりよと古の内と守字固と  
 世を同うして昔世をよと古のいふものよと古の  
 と稱しよと古と守
- 一 昔世をよと古と守  
 伊勢の美濃善く一徳流とめよと古の徳流の中未流のよと古
- 一 徳流の徳流をよと古と守  
 徳流の徳流をよと古と守

次は誦論後と号し、古人の言をよみ、其を誦するに  
其を誦するに、次は其の言をよみ、其を誦するに  
其を誦するに、次は其の言をよみ、其を誦するに  
其を誦するに、次は其の言をよみ、其を誦するに  
其を誦するに、次は其の言をよみ、其を誦するに

誦論凡例

誦論目録

總論

上代風

宗祇

守武

宗鑑

古風

貞徳流付

季吟

維舟

貞室

立甫

西武

梅盛

松堅

檀林風

宗因流附

西鶴

正風

芭蕉流附

其角

嵐雪

江戸風

其角流附

不角

伊丹風

鬼貫流

伊勢風

乙由流





美濃風

支考流

半時菴風

淡々流

附 羅人

誹諧談

附 古又發句

附録

一新古の発句を混雜し四季を分る記と

誹論目録終



誹論卷之一

平安

秋月下白露編輯

總論

夫誹諧ハ我朝の風物なり人皇六十代醍醐天皇の  
 勅をまうり紀世之古今和歌集又撰りては  
 ようむとののけ流とそなまうり後代への撰集  
 ありてまうりそむいかなる三十一又その一首をよ句  
 下句とこころをわたりてそのまうりては  
 おれしと評す

奥ふはるおとのまゆさう

紀貫之

たれもあつていふこと

人皇六十二代村上天皇御製

おれもあつていふこと

と作らばいふこと

夢又あつていふこと

と作らばいふこと

人皇七十三代堀河院御製

あつていふこと

とのあつていふこと

後醍醐天皇御製

あつていふこと

と作らばいふこと

句の紀原

人皇七十四代崇徳院御製

と作らばいふこと

たれもあつていふこと

あつていふこと

とあつていふこと

らくまの神のなつていふこと

くけりていふ

徳のいふにききかきかき

おもむかひの丸をきかき

西行法師

世の井八まん丸よこそそ

西行法師

あそおもあもはもはも

人曾八十一代安徳天皇の御宇に福島の系に月く  
はるよりつらつらに登蓮法師文を抄く所を為のあそ  
こつらつらに

前大政大臣平徳盛云

ゆゑはそつへそ力のあつま

登蓮法師

大さつハもつ行よお回えぬ

人曾八十二代後醍醐天皇の御宇に建文元年に源朝太郎  
種人急下つと洛一のいへつ時侯名の橋の石よそ  
酒つらつらつらつらつら

前右大臣源朝太郎

橋本のつらつらつらつらつら

平景時

きくねふのくまをあはれ  
何とてうたてゆのかく流るるん

從二位家隆郷

むめあふもすくもあはれ  
この層もくもあはれ

前中納言定家郷

大正の御車さくく山さみ  
さくくさくくさくく

皇太后宮大主後成女

ほろろろろろろろろろろ

とりたはる幾そのふさそはくく

待賢門院堀川

丁よか〜らのきやふら〜ん

前大納言考家郷

か〜くき〜れと替ぬ和ふ〜

女嘉門院日奈

あはれ〜のまの〜自大〜ん  
や〜の〜の〜の〜の〜

前大納言為氏郷

た〜の〜の〜の〜の〜

ゆゑにわがまゝにさすべし

新河法師

みねまゝにあらはせしむ

上古流傳の旨句を尋ねた大と集よもあはれし出づるは  
愛又思ふと又流傳の旨句の聖賢を

人皇八十四代順徳院御宇鴨もゆれまはるる  
と

くゝのひまゝにあらはせしむ

とすゝられしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

人皇百四代後土御門院御宇の應永年中宗祇法師といふは  
性ハ飯尾氏といふ紀州の人なり。宗乃連宗又比類まこと連  
織之宗乃ハ東下御宇守年常縁より相傳をかの聖州を  
累代の宗人なり。中院也是朝よりお傳し古今傳  
授もまこと宗より。宗乃祇法師といふけしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
くゝの角地坊先祖より。宗乃師も源氏も。宗乃  
宗祇法師より。宗乃宗より。宗乃宗より。宗乃宗より。宗乃宗より  
とも辨しむるもあはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
是ハ流傳連宗の真祖なり。宗乃宗より。宗乃宗より。宗乃宗より。宗乃宗より

唯しちかろくとりかへその後天文年中勢州比田の村  
 鹿本内守武朝臣を以て能詩掲吟る句真ありあり此  
 守武朝臣も連名の達人あて宗祇法師も亦知らき  
 人まう能詩よ句の式いまま定まらうとて六路の宗也  
 周桂いふと存けしと汝とあよまきを用んた女の返るも  
 中おこせされも何れも宗也あうる句成就せし録奥の中  
 韻あつ宗祇法師の三箇よ句よ録奥あつ十韻あつたなり  
 多之然ハ能詩よ句の按も宗祇法師の百韻を繼とて  
 何れも何れも加つまてふとて世よ何謂守武子句  
 たりといふ宗也繼法師の六州法師の宗也といふ年の流

足利家よまことその宗祇三所範光といひて後よ羅發とて  
 清よとてとて連名を能く能詩を以て守武朝臣にも  
 又通あつる宗祇法師と道達院と合群もく起はまて  
 新築波よ能詩神よ能を懐と大築波よを撰と能詩符合の  
 繼よと亦掲吟三百韻あつたの大築波よ宗祇十三回と  
 何れも何れも守武と世をもつて能詩よ何れも  
 あり何道達院と傍の周長を由傍いせまてなり地也出る  
 ありありなる何れも何れも何れも何れも何れも何れも

内大屋宗隆云

宗祇といふとていふとていふとていふとていふとていふとて

宇智法師

のまんととまゝいゝまの法言

房のわらをわくの如く後句を付けりていふより一四記よりえり  
人皇百八代後湯成院新皇天正年中貞徳といふ人揚州言  
槻の場を永種の子とて入江氏とまきとも母方八和州信長城  
を松永輝正久秀の一族とてなまきと松永苗成よりぬ松永  
貞徳といひ系脈よりぬと和宗連とをさといひ和宗といふ名  
あり夫後病疾あり七目国とてかろして白髪のおおぬを思ひ  
あけて延陀丸とぬ丸と自童名の子孫を呼ぶぬぬぬぬ  
とら号とけ人を得る義徳人といふとまきと和法大師の流を

ぬぬ能者のゆゑとて和宗八龍を辨大納言とて  
相公中院入彦房より換りていふと八細川を自法平九条  
下攻山よりいひ連とて大園秀吉との所抱の臨江女館也法  
橋の門人あり相公八和宗よりいひて和宗の連とていひて  
いひていひていひていひていひていひていひていひていひ  
たり極よ世人宗也と稱しとて和宗の連とていひていひて  
貞徳のよぬとていひていひていひていひていひていひて  
和宗の連とていひていひていひていひていひていひて  
大よ成とていひていひていひていひていひていひて  
人皇百九代後水尾院徳宗とていひていひていひていひて

とらうし脚をれさうとさうに

三日

後水尾院

早稲中稲ふくことあつきのう一二三  
 全書寺の初業の時田さうり殿後まで  
 あはるのうらやまのきとさうり物月  
 戊申正月五日のうらやまのきとさうり  
 けしつはさうりさうりさうりさうりさうり  
 あつきのうらやまのきとさうりさうりさうり  
 けしつはさうりさうりさうりさうりさうり

さうりさうりさうりさうりさうりさうり

白き乃や嬉々ぬむうのきさのぬ

さうりさうりさうりさうりさうりさうり

けしつはさうりさうりさうりさうりさうり

後西院

さうりさうりさうりさうりさうりさうり

加つものさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 おろくさうりさうりさうりさうりさうり  
 けしつはさうりさうりさうりさうりさうり



多ありく内は... 親を... 維舟... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳...

貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳... 貞徳...

け耐五冬南鳥丸新玉津島社中下位一終ふそそしと来り  
 台令に依り男淑妻とたゞ冥途より回し恩縁を以て後小再昌院  
 法皇の位に叙せられ維舟に貞徳と申遠し里村の門に入り貞室  
 相賞と士洛と居り貞徳傳事の記述より伝りたりしなり  
 りれとけ門はたし詠士あまこたりしに 人皇百十二代聖元院御宇  
 延宝年中松州大坂小西山宗因 別号一画一名梅屋又西海とも号す  
又傳小伝とも松天後宗因とも といひ  
 豊傑の士とて連ふを里村家よりその詠借と宗濫と遠風を  
 慕ふ自らの風流を潤色しりたりしなり後武州小下向し  
 終林軒書まといひ詠士乃乃小素宿しりたりしなり松意軒  
 号より思ひ付佛家の権柄に附合しりりこれを世俗終林詠借

といふ武江に一風は流石と云ふ松州の事なり大下向し小既は後  
 水尾院も貞徳流を好されりとも終林風のそんたりしなり  
 急いりよけりけりいりて後林の詠借を好しりり

後水尾院

あてし雲と齒とをけりあちりけり

あせみそけり飛りて摘りて何れそ那

愛ふお力り貞徳流の古風を甚る廢し詠借宗因小一  
 宗因門人小井系西鶴といひる英雄もそ一日小二系三千句獨  
 吟と終林の事いりしなり対極まといひる詠士元来伴忍重  
 城と孫堂守女正殿の御内は松尾甚七前といひる人より仕官の

録乃山堂雪の光り又和漢の文そのまのそ風雅よころ  
 ごとく如く詠諧よりあけつ本門をとおく雅後一禅悟とたう  
 詠者極まるといふ実名と一東野より向一深川より菴成詠  
 一梅の芭蕉を極くト君の只以芭蕉意洞と梅一宗因より  
 和の後梅乃山風よりわらひと君く活とあつまをこつ悟こ  
 志く山風をこつと重吟門人たれも古風とさう寸草所  
 一流をたれふ於今人の改よりよまよ集り門人市をさ守芭  
 蕉洞の菴たるを世人終る芭蕉意菴と号一芭蕉意菴  
 梅一東野より集んたう一宗因の弘め一後梅詠得大り  
 おと後より芭蕉意菴あまの和の菴集をたう并ふ西行山

菴集を熟讀し詠諧又眼を付るをたう一秀逸  
 此より奥州の御く松高菴深をこつ山風詠をたう記の  
 小冊をたうはと世より奥の菴をたう実東意く芭蕉流  
 的服一宗因より和の詠梅一向の瘞を芭蕉初く故より  
 詠を教訓と芳聖の御をたうあま和の詠記のあまとも  
 芭蕉記をたう芭蕉生得致景よまむるは故より和の詠  
 正風の詠諧を行門人たう事律より和の詠どく克満  
 関の芭蕉因の弘め一和の詠どく亡の宗因の詠諧亦蕉の  
 一和の門人教をたう和の詠どく其菴

菴集といへる芭蕉  
 菴集より出別号芭蕉と云  
 服部 菴集

姓氏  
三祥  
のいひおはせし書名のいふふたはりのいひおはせし

年表あり  
極極あり  
門人より角角あり

とらぬ

よりの極とさうの極の海

内國の撰し海取集にいふはあはれまはるの上の法人と辨らる色  
意書の骨肉たるは其の角のいふを突せしめたるは其の極の故  
たは又お對しし書意書とたはる大よれお蕉門集お新撰書す  
歌辭書たるはいふはあはれまはるのゆまも撰し書とすして  
ふれれの海流とていひてし書意書門流流とあはれはるは  
初ふれる海内流流とていひてし書意書の流流とあはれはるは

とていひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

意書七後山内より出るといふ一流をいひて流り八生の撰集に

人皇百十代東山院の御宇に時菴法松州大坂の吾洛よと出  
又藤よはしし一筆と云

とていひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

より流りていひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

門人あまうて後を抄府より古く流り意書をいひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

をいひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

撰書とていひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

といひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

ゆへ本とていひてし書意書の業の自らなるとは悟悟とていひて

三才の平と終身を以て連(一)の遊歴は亦た亦た也(二)夫れに(三)
 在りて(四)重(五)八(六)十(七)二(八)才(九)少(十)く(十一)
 絶(十二)と(十三)世(十四)意(十五)義(十六)為(十七)十(十八)二(十九)
 歳(二十)少(二十一)く(二十二)終(二十三)身(二十四)遊(二十五)
 歴(二十六)を(二十七)厭(二十八)う(二十九)古(三十)代(三十一)
 遊(三十二)歴(三十三)を(三十四)よ(三十五)う(三十六)
 海(三十七)内(三十八)の(三十九)人(四十)の(四十一)
 信(四十二)を(四十三)奉(四十四)連(四十五)家(四十六)の(四十七)
 家(四十八)祇(四十九)を(五十)考(五十一)ら(五十二)守(五十三)
 後(五十四)世(五十五)の(五十六)人(五十七)も(五十八)
 其(五十九)角(六十)四(六十一)十(六十二)七(六十三)
 歳(六十四)少(六十五)く(六十六)其(六十七)義(六十八)
 の(六十九)事(七十)を(七十一)守(七十二)り(七十三)
 一(七十四)流(七十五)を(七十六)な(七十七)り(七十八)
 一(七十九)流(八十)を(八十一)な(八十二)り(八十三)
 一(八十四)流(八十五)を(八十六)な(八十七)り(八十八)
 一(八十九)流(九十)を(九十一)な(九十二)り(九十三)
 一(九十四)流(九十五)を(九十六)な(九十七)り(九十八)
 一(九十九)流(百)を(百一)な(百二)り(百三)

江戸物

武州江戸ハ甚義以テ貞徳の古物也(一)
 貞徳の古物也(二)
 貞徳の古物也(三)
 貞徳の古物也(四)
 貞徳の古物也(五)
 貞徳の古物也(六)
 貞徳の古物也(七)
 貞徳の古物也(八)
 貞徳の古物也(九)
 貞徳の古物也(十)
 貞徳の古物也(十一)
 貞徳の古物也(十二)
 貞徳の古物也(十三)
 貞徳の古物也(十四)
 貞徳の古物也(十五)
 貞徳の古物也(十六)
 貞徳の古物也(十七)
 貞徳の古物也(十八)
 貞徳の古物也(十九)
 貞徳の古物也(二十)
 貞徳の古物也(二十一)
 貞徳の古物也(二十二)
 貞徳の古物也(二十三)
 貞徳の古物也(二十四)
 貞徳の古物也(二十五)
 貞徳の古物也(二十六)
 貞徳の古物也(二十七)
 貞徳の古物也(二十八)
 貞徳の古物也(二十九)
 貞徳の古物也(三十)
 貞徳の古物也(三十一)
 貞徳の古物也(三十二)
 貞徳の古物也(三十三)
 貞徳の古物也(三十四)
 貞徳の古物也(三十五)
 貞徳の古物也(三十六)
 貞徳の古物也(三十七)
 貞徳の古物也(三十八)
 貞徳の古物也(三十九)
 貞徳の古物也(四十)
 貞徳の古物也(四十一)
 貞徳の古物也(四十二)
 貞徳の古物也(四十三)
 貞徳の古物也(四十四)
 貞徳の古物也(四十五)
 貞徳の古物也(四十六)
 貞徳の古物也(四十七)
 貞徳の古物也(四十八)
 貞徳の古物也(四十九)
 貞徳の古物也(五十)

加へ此迄より世俗は凡そ一統の世に因て細  
 とくは世に因て一統の世に因て細  
 ようとて世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細  
 ともいふ世に因て一統の世に因て細

延享年中出山の撰に江戸八百員を以て後世  
 の江戸流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 保平中百卷を以て越波江人の流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは

伊丹流

揚州祥丹の御流は江戸流の古流一統より百九流を助なりし  
 流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは  
 伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは伊丹流と云ふ事ありしは

よ梅翁の心とてさう目く大よけつれ身徳のたれとられ  
ハ大よきと梅翁滅後後徳ハたれもせられとさうと付付  
句とて人頼時代の事おととと梅翁のたれとられ  
きハ付句又さへ信く舞句のたれとられ大回とられ  
も舞句とて一伴起くとたれとられ

百丸

踊まれば元ある珠粒とて後生にんを

くき世俗も舞句とられとられ

鬼貫

除夜くく鬼神の事守願と量

かく金伴一抱徳さう伊丹物といふけ鬼世の事とられ  
ふかくく鬼世と老人とたれとられ佳境とられ  
徳世の事徳とられとられ  
涯徳力の高死事大徳おねとられとられ中おも

鬼貫

面とてさうとられとられ

名月

更りや花を紙おも押さのま  
秋ハさう有ね鳥といつともなく

空乃和尚なるちう飛流いささか

こまこと同の一時鬼母と答ふ日

庭そのよまろく咲くも椿の那

孫府より名をたふ方といへる娼妓の

墳きつら

此墳ハ柳まゝくもあまきま

三月晦日雨降るま

まゝのりふまうとく降る

こま餘ハこまを畧と謂ふ古今格よの宗色といふ

伴勢流

勢州の飛流ハ田舎ハと古天文年中守武より起る守武より

湖亭一枚田檢校

小申古く是より園友

中川氏 伴集く園友 後免 宗色

より男乙空小譲る守武が上代の流より是より貞徳流と名を

の初より貞徳の古園友の初より慈母の二流より一より園

友の男乙空より流引と勢州の飛流の祖ハ守武かれも代々よ

り鳴んる世俗伴勢流と号する事けし中より流とて中老年

麦畑の中より蕎麦をむとて刈麦林舎と号を園之後世麦林と一

名よりつとて流引今よいり勢州ハ悉く麦林の内伴を号す

あり人間守武より是より一より元七八十年より及へるの飛

流伴流引を名にといふ人答曰天文の乱より承録矣心



まゝ天下秘まると能くまゝにたゞしきものゆゑに思はる  
 よういふ慶長の初より其年中より天下静謐となり  
 寛永元年丹波の事ありて後之寛文年中任口勢州久居守城に  
居りて依後守に  
 能く執らるゝ依見任口より同名別人ありて比来静なり  
 吟男御事依徳まゝの時より老を招き新ハせしむる  
 久居八百六十員とて其ノ守本掃くよありて亦昔其海ハ蟬吟  
 伴州之野守城之居りて依後守に  
 居りて其女ハ居りて 御内の人々延享年中の勢州御城より居りて亦  
 其守居りて御守を好せらるゝ比来静なりとて其守向たりとて守  
 利守の事ありとて

歳暮

くまの守の事ありとて  
 加格の事ありとて折くや大守の勢州ハありとて其守の御守の因  
 縁ありとて其地ありとて今より能くお守の團ありとて其守を其守の祖  
 とて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて  
 其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて  
 其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて

其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて  
 うそ此やうありとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて  
 かく一流を成りとて其守の御守の事ありとて其守の御守の事ありとて



一 懐もどして東ののり夫加甫  
吾月や掛けのあらし 砥並心  
しる事おとらうしよりのそね

元附句の道守引よ續ち論葛根系なるへるまきとあつた  
治東徳林寺の河ぬり産那の古境に帰る梅花佛とまき  
を流しまきとまきとけし老の事とまき流の門徒回すまき  
まきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと  
國の滅び

中時菴流

中時菴流と武平の系師と下つたまきとまきとまきとまきと  
まきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと

南林下河系菴水のまきと寓居のまきと

流

宿のまきと宿のまきと

石ころや紙書流る夜のまき

け愛句を始とて追日佳句を吐くまきと

と出あつた行よまきと下下の俗人はいよまきと

風折ふ志ふれ申にも俳諧をまきの法を師となすまきと

おへく五橋市代宿 南金手一宿李風市代宿 石系流念夜まきと

しよまきと俳諧おまきとまきとまきとまきとまきとまきと

宿家へ俳諧許なつてまきとまきとまきとまきとまきとまきと

まきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと

〇 龍踏巻えふ門人あきこあさる沖の橋本羊秋 後松本苗 氏より龍踏の口評  
 人龍踏止者と成けあさ甚る龍其の角龍のまのこくす討  
 老龍のあつと龍身くく大よりまより討老龍板の橋本  
 大坂の海く又つ龍を引む龍踏沖龍の橋府ぬくけし討老龍の  
 再真つう龍流も乃く西又あく龍巻くけ門の龍よ沖あも真  
龍尾州所産也 志水甲斐守辰 鳥林 紀州所産也 三浦吉門守辰 南里 紀州所産也 妻板常刀辰  
 國の由家沖まぐけ門人くく龍のあ巻く一統とく龍の甚る  
 龍あ海のまの角より巻えなく龍中よりくく累年の巻え  
 の巻えより巻えと一巻龍巻あおあくくあくく其の角より巻え  
 又一巻を引けけ門下敷まより成くく龍流く巻えく人くく一

〇 龍と龍と強よ巻龍の士より巻後大よ人を巻と龍踏流  
 引車輪のつとく龍くく門人又教訓くく巻く一巻を引よと  
 のん巻より巻え大よ巻え付け巻巻向巻くく龍の巻あ物  
 あつとくく門人の沖龍の羅人といへる龍士是も英雄あく初  
 は巻討老龍の巻肉巻と巻え付けくく申は巻あくく真龍流  
 と巻く巻成あ龍踏一巻を流と巻向の上より巻く又巻向  
 も巻えの向も巻く

陸牙高野人

龍くく巻えなけくほくくく

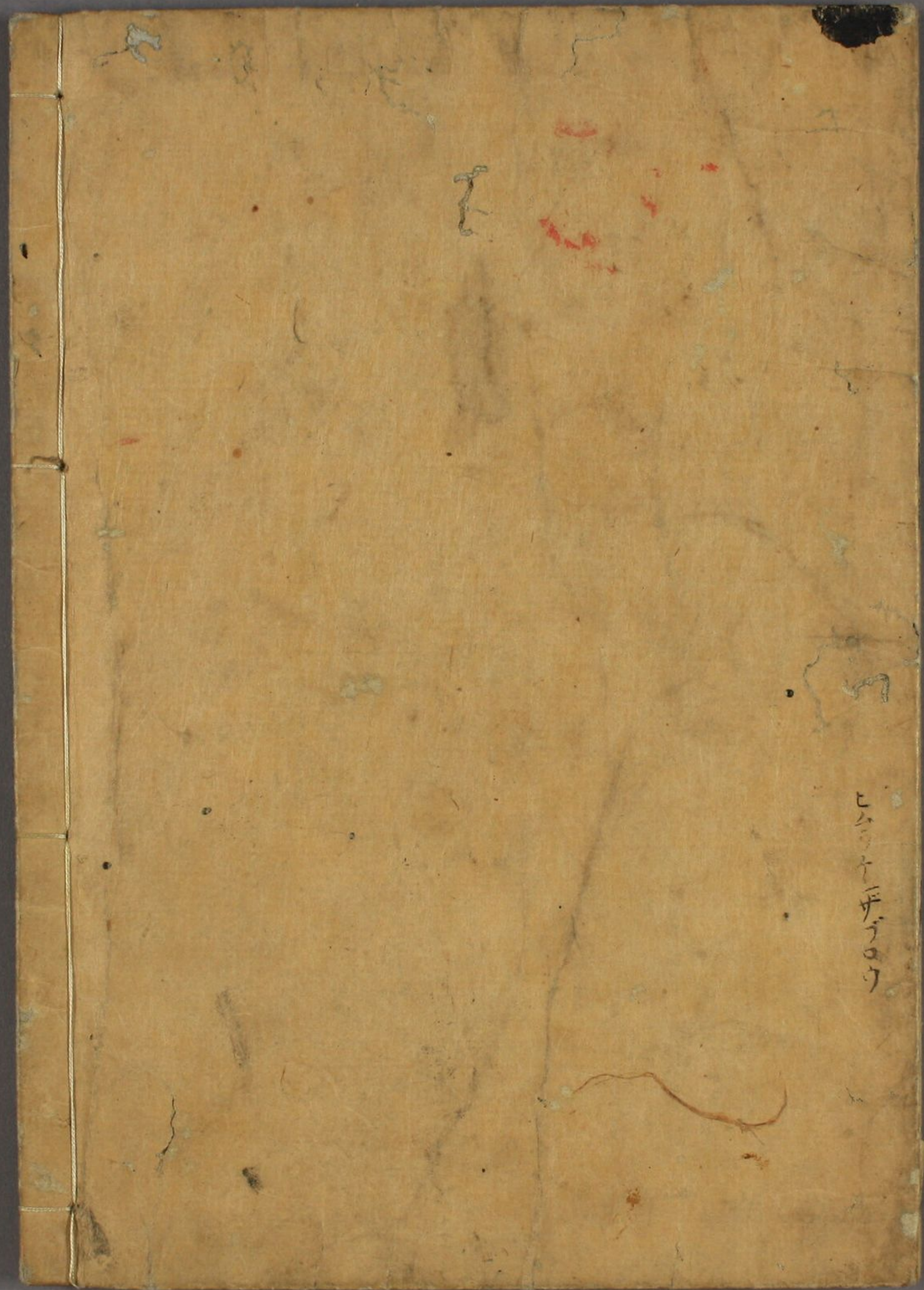
歳旦

初日孰とれあはれむらさき

かく一流をかきとてとてはあはれむらさき  
あはれむらさきとてあはれむらさき  
あはれむらさきとてあはれむらさき  
あはれむらさきとてあはれむらさき  
あはれむらさきとてあはれむらさき  
あはれむらさきとてあはれむらさき

飛節書一終

あはれむらさき



ヒコウキザブロウ